

昔話の語り手と聞き手

Research Materials

武田正

完全な雑談だと思って聴いてもらえれば、大変ありがたいというように思います。

私が大学を出まして、地方の高等学校に就職をしました。フラワー長井線の終点に荒砥（現白鷹町荒砥）という駅名があるんです。そこに荒砥高校という高等学校が今でもあるんですが、そこに職を得まして、七年ほどそこでブラブラしておった間に、『荒砥町史』という町史を編纂している方がおりました、その人の所に遊びに来いというふうに言われまして、まだ一般の家庭には広がっていなかったテレビがその家にあつたので時々お邪魔して、白黒のテレビを見せてもらった記憶があります。

そういう中で、たまたま生徒諸君が、秋の文化祭に民話劇『夕鶴』をやりたいというようなことで僕は、一生懸命ガリ版を切って脚本を生徒諸君に渡したんですが「明日までに読んで来い」、なんて言っておったところが、次の日になってその一人が、うちのお爺ちゃんが「この話知ってるよ」という話だったもんですから、「じゃみんなで一回聞きに行こうじゃないか」と。まあ言ってみれば「鶴の恩返し」のお話なんです、

それを聴きに行った訳です。

当時はまだテープレコーダーというのが、こんなにデッカイやつで学校に一台しか無かったんですが、これをそっとお借りして、自転車の後ろに積んでその家にお邪魔をして話を聞いた時に、それ以外のお話も確か七つか八つくらいのお話を出してくれたというふうに思うんです。

これを収めて来まして、次の日に学校が終わってから部の練習が始まったんですが、その初っ鼻にそのお話をみんなで聴いたという記憶がございます。

こん時に聴いた話は、半分は伝説で半分が昔話であつた訳ですが、これが昔話かあるいは伝説かなどということに関しては、全然無知であつたもんですから、ともかくもそれ非常に面白いなあという印象を持って、『夕鶴』の指導という程でないんですが、やった記憶があります。

そして、それを文芸部で出しておる、学校で高校が出すんですから、レベルが非常に低かったと思うんですが、それに載せろと言われまして、共通語にしましてこれを出したら、町の人達から二・三、話があつてそういうお話なら、「俺も知っている」というような人が二・三人集まり

ました。

そこでまだテープレコーダー自体がなかったものですから、ただノートを持って聴きに行ったという記憶があります。「猫と南瓜」のお話を、大変印象深く聴いたのは、そのお話が最上川の舟運、主に塩を扱っておった塩商人が、宿に泊まった時にこのお話を置いていったんだということなので、ああそういう事もあんなのかなというふうに思っていたところでした。その後、その高校から米沢の高校に転勤する時に、大体当時の仕来りとしては、何かタオルとか手拭いなどを転任する先生が、みなさんに差し上げてお別れをするというのが常識だったんですね。

ところが、僕は毎週山形に出まして、日曜日は毎週決まって映画を観る、そして終バスで下宿に戻ってくるという生活をおったので、貯金が全くゼロだったんですね。なんともしょうがないので、それまで聴いたお話をちよっとガリ版の上手い図書館の事務員をやっておった方が、「じゃ俺がガリ版で刷ってあげる」というふうなことで『卯の花姫』というのがそこにあると思うんですが、それを作ってもらってほとんど無料で作ってもらって、お世話になった方々に一冊づつ差し上げて、米沢に移った訳です。

米沢に移った時に、たまたまその本の事を『山形新聞』で取り上げてくれたんですね。転任に当たってこういうガリ版ができ上がったというので新聞に載せてくれましたんで、これを見て米沢市内のあちこちから「俺の所でも知っているぞ、遊びに来い」と言われまして、行ったのがプリント(当日配布資料)中の三番目に安部忠内さんという方がいらっしやるんですが、ちよっと体が不自由だった方ですが、当時の旧制中学を出た方でございます、柳田の『日本民俗学入門』などを持っておりました。この人が、遊びに来いということになったので、遊びに行ったのが一つのきっかけかなあと 생각합니다。

その後、荒砥高校家庭科の先生の義理の母親、お姑さんに当たるんで

すが海老名ちやうさんという方にお会いしました。大変語りが上手な方でございまして、私は半年ぐらい通ったかなんですが、百四十話程のお話をお聴きしました。

ちよっどこの頃に山形目指してやって来てくれたおった児童文学者に松谷みよ子さんがおりまして、来たので、海老名ちやうさんの家に案内をした訳です。大変意気投合なだったので、百四十話のうち百二十話ぐらいを『牛方と山姥』という本にまとめさせてもらう時に、「誰からか序文書いてもらった方がいんじゃないか。松谷みよ子さんは、大変高名な方だから」というので、お願いをしたら喜んで序文を書いてくれた訳です。

この頃から、もう少し本格的に昔話そのものを集めてみようかなあと考えて、お隣に米沢女子短大がありましたんで、放課後に遊びに行きまして、というのは、後に学長さんになるんですが、上村先生の恩師折口信夫先生のお弟子さんというのは変なんですけど、そういう立場に立っておりまして、折口先生は、二回程米沢に遊びに来ております。その先生の紹介で(折口が)白布高湯という温泉に泊まりまして、そこで短歌を残してくれているんですが、そういうことで割合に柳田民俗学の基本的な資料だけは、米沢女子短大の図書館に入っております。そこに遊びに行った時に、『日本昔話名彙』などを持っておりまして、私はまだ持っておりませんでしたから、しょっちゅう借りに行つて、「今まで集めたものを一冊にまとめる時に順序をどうしたらいいのか」といふようなことで参考にさせてもらった記憶があります。

海老名ちやうさんとの出会いから「昔話をもう少し組織的に集めてみようかな」というように考えて、基礎的な文献がないのかなあと思つて出会ったのが、関敬吾先生が書いた、『日本民俗学大系』の中の「民話」の部門だったんです。これをバラバラとめくつておりましたら、全国の資料収集のことが載つておりまして、山形県の方を見たら、山形県の場合

合には、清野久雄先生（故人）という方が、柳田さんの弟子のお一人な
 んですが、まだ立川町（現町名＝東田川郡庄内町）にご健在でございま
 した。この方などが、庄内地区の昔話を集めていらつしやるということ
 は書いてあるんですが、米沢に関しては、あそこは伝説しかないと思
 っているんですね。これ私、読み誤りをしまして、言ってみれば、出版さ
 れたものとしては伝説しかないことだったと思うんですが、「米
 沢に伝説しか無いというのが昔話がないのか、これおかしいと、今まであ
 ちこちで聴いたことがある」ということから、これに少し反発をしなが
 ら昔話を集め始めたという状況が一つありました。

で、海老名ちやうさんと平行して約二百話の語りを持っておりました、
 工藤六兵衛さんという方が、同じく白鷹町貝生という集落にいらつ
 しゃったんです。この人は小学校三年までしか行かないのに、大変話が
 上手であると同時に大変勉強家なんです。で、若い頃には男でありな
 がら本家の子守をやったと、これオトココモリとこの辺で言うんですが、
 そういう人なので大変苦労なされた。というお話も交えて約二百話、
 これには、私記憶に残っておるのが、大変痛切なことなんです。百九
 十七話お聴きをして、テープに収めまして、翻字をして、『とーびんと』
 という名前でガリ版を四冊刷ったんです。そこで、突然「この次行
 くからな」という電話を差し上げたなら、「実は今朝入院した」というお
 話だったんです。どうしようかなというふうに思ったら、今度病
 院から工藤さんが書いたハガキが来ましてね、もう三つ思い出したから
 来いというふうに言うんですね。そうするとちやうど二〇〇になる訳で
 す。そこで行こうと思つて、その仲介をやってくれた方が、同期の③に
 書いてある（当日の配付資料参照）奥村幸雄先生（昨年お亡くなりにな
 りました）。先年斎藤茂吉文化賞をいただいた方でございます。この方
 が中に入つてくれておつたので連絡をしたら、退院するまで待つて
 おつた方がいいんじゃないか、というので、見舞いには行つたんですが

その三話というのは聴かないままに残念ながら入院でそのままお亡くな
 りになってしまったんです。というようなことで、大変記憶に残つてい
 る話者であつたと言つてよいと思います。

これと平行して奥村幸雄先生の手引きで、小国町大石沢に行く機会が
 見つかりました。その次に書いてあります、川崎みさをさん、高橋し
 ぶさんという方は、小国の方でございまして、小国の大石沢という所
 にお住まいのお二人だったんです。共に百話クラスの方でございませ
 う。これは山形県では大変有名なんですけど、叶水という所が大石沢のちよ
 と手前にありまして、そこに基督教独立学園という高等学校がございま
 す。これを作つた方は、内村鑑三の直弟子のお一人でございませう。だか
 ら、今でも大変小規模なんです。ここに高等学校がありましてね。
 東大出身の方が、お二人学校の先生としてお勤めでございませう。大変珍
 しい学校でございませう。

ということとそこで寄つたりもしまして、川崎みさをさん、高橋し
 ぶさんのお二人はちやうど隣の家でございませうので、行くとバスが朝夕
 一本くらいずつしかありませんので、何回か泊めてもらった記憶がござ
 います。

特にこのお二人の中で苦労なされたのが川崎さんの方でございま
 して、あんまり家が裕福でなかつたということもありまして、第二次世界
 大戦中に千葉辺りに行って、女中奉公をしたという方でございませう。
 それだけにお話が、非常にスムーズでございませうね、基督教独立学園
 にお手伝いなんかもしておりましたんで、東京の事情なんか比較的明
 るい方であつたんですが、そういうことで、私が「こういう民話の辺
 りころがつていないのかな」というふうにお聞きすると、決まってあち
 こちに電話をしてね、ここにはこんなお話があるというようなことで、
 逆に大変いっぱい教えていただいたものでございませう。

こういうことがあつて、ぼつぼつ昔話が集まつてきたんですが、まだ

その段階では、伝説と昔話という区別などもあんまり定かでなかったと記憶しています。

こういう段階で、たまたま日本民俗学会年会在、羽黒山を会場に行われました。これも私の記憶には、大変鮮明でございまして、大きな一軒の宮田旅館という旅館があるんですが、これが元の修験の宿舎であった坊の跡なんですね。今でも旅館やっておりますが、そこに全員が泊まりました。この時に私は、大変幸運にも新潟の水沢（謙一）さんと同じ部屋をいただいて、そこでいろいろ新潟の事情などをお聴きした記憶があります。もう一方の大部屋では、確か和歌森太郎先生が中心になって、あの方は、肌の非常に白い先生であったというふうな記憶にあるんですが、もろ肌を脱ぎましてお酒を召し上がったというふうな記憶があります。そして、酔うと次第に顔の部分から少しづつ身体の白身が赤く変わったという記憶があります。周りにはたぶん宮田先生をはじめ、当時の東京教育大の先生方が周りに集まっておったんじゃないかなというふうな思っています、一晩ワイワイ騒いでおりました。

こういう記憶があるんですが、ここで、「何かお前頑張ってることないか」というふうな、戸川安章先生、出羽三山の研究の安章先生ちよつと現在は、百歳になったんですが目が悪くって見えなくなったというお話なんです、身体の方は相変わらずお元気でございました。（百歳でお亡くなりになりました）

というふうなことがあります、そんな時に『雪女房』という本、下手くそな民話集を初めて出した記憶がございます。こんな時に共通語に直そうかどうか、という風なことが周りから出たんですが、あえて「語りそのまんまで出そうじゃないか、その方が良い」という風に戸川先生なんかからもお電話をいただきましたので、語りそのままをそれに載せまして、一冊にまとめた記憶があります。今振り返ってみるとちよつと気が恥ずかしい本になっちゃっているんですが…。

まあそれはともかくとして、それと並行して昔話を聴きに行くと、決まって次にお邪魔するまでには、それを何とかガリ版にしてというように行くと、大変喜んでくれたというようなことがあります、そういうのをずっとその後も続けてきたという状況があります。大体当時のテープレコーダーですから、オープンリールの時代にはこれを翻字するのが非常に厄介で、私が動き回った山形県の場合には大体言葉が判るんですが、他の県の方のテープなんかをお聴きしても、意味が全然取れなかったという例があります。やっぱり私は、「臨場感」というのは非常に重要な「だなあ」というふうなその時思いました。語尾なんかは他の方が録りなされたテープでは、判らない事がしばしばあったんですが、自分が聴きながらテープを録ったものはみんな判っちゃうんですね。そういう意味では、民話の語りというのは、「やっぱり語りが一番基本なんだなあ」というようなことをそこで覚えさせてもらったというふうな言っていると思います。

もう一つは、ウタですね。小学校で私なんかも当時の小学国語読本とこので習った訳ですが、そこには「花咲か爺」をはじめ「桃太郎」その他みんな入っている訳です。ところが、筋書きはもちろん学校で習った訳ですから、覚えてはいるんですが、特に川崎さん高橋しのぶさんなんかに行ってお邪魔した時に、大変びっくりしたのは、「花咲か爺」というのを知っているはずだから語ってくれ」というふうなお願いをしたら、そんな話全然知らないというふうに向うで言うんですね。そこで「困ったな」と思って、みんな知っているはずだと思っただけで質問しているのに、という気が一方であったんですが、しばらくお喋りしている間に「ああ「あーかいコンバコこつちゃこい、しーろいコンバコこつちゃいげ」というあの話なら知っているよ」と。で、その方、高橋しのぶさんから聴くと「これは「花咲か爺」なんて言わないで、「タイゴコ

ムカシ」という風に言うんだ」と。クイゴコというのは、この辺で子犬のことを言います。それで教科書で習ったものに関して言わせれば、「こ掘れワンワン」という風に書いてあるんですね、教科書には。ところが高橋しのぶさんのお話では「これは間違いだ」というんですね。「こ掘れクエンクエンクエン」と鳴くんだ」と。今まで可愛がってくれた子犬が「背中に乗れ」と。そして、行って宝物を掘り当てることになるんですが、「こ掘れ」と言った時に、今まで可愛がってくれた子犬が、お爺さん、お婆さんに擦り寄ってくる時に「ワンワン」とは決して鳴かない」と言うんですね。「クエンクエン」言いながら寄ってくるんだと。だから、「こ掘れワンワン」ではなく、「こ掘れクエンクエンクエン」という風に言うんだと言うんですね。ああ、そういうことがあるんだという風に思っ、私大変びっくりしまして、それから、関敬吾先生の『集成』あるいは柳田先生の『名彙』とかを拾ってその表題でお聞きすることを辞めちゃったんです。むしろ例えば「桃太郎」の場合には、「あーかいモンモこっちゃ来い」という風に歌うんですね。一番最初に。あーおいモンモそっちゃ行げ」と言うんですね。そうすると、赤いモモはニコニコしながらこっちの方に流れてくる。それから、青いモモはそっちに行けと言われたから、向こう側をメクメク泣きながら流れて行く、ということが「桃太郎」の始まりなんです。

というふうな意味では、ウタというのは、昔話の中に入っているウタというのは、大変貴重なものだ。そして、記憶に残すには大変重要な役割を果たしているんだなあ。というふうなことに、気付かせてもらったというふうな言っ、良いと思うんですね。

こういうことで、ここに書いた海老名ちやうさん、工藤さん、川崎さん、高橋しのぶさん共にお亡くなりになるまで、亡くなってからもその家族の方々と時々連絡を取ったりしているという状況があります。

その後の、近きよさんという方は、大変苦労なさった方で今は、山形

県一の漬物会社を孫さんがやっております。ということなんです。この方は平野部のお生まれでございます、お父さんがかつての村長さんをやったと、いうふうな方だったんですが、マッパジメ（＝一番最初に）紹介されてお邪魔した時に、「いつ、何歳で結婚なさったんですか」なんていう、私は履歴をお聞きするつもりで質問したのに、早速夜這いの話になっちゃったんですね。「夜這いもされない娘というのは、結婚の資格が無いと我々の時代は言ったもんだ」と近きよさんが教えてくれるんですね。今晚来ても良いよという時には、二階の自分の部屋から赤い布を垂らすんだと。来て悪い時は、白い布を垂らすんだと。来る時には、その脇に柿の木が植えてあったんで、そこを登って来いとかね。というふうなお話をしまして、「ホントに夜這いされたの」というふうにいったら、「いいや一生懸命迎かえた方だ」というふうにおっしゃるんですね。お父さんが村長さんですから、そんな家庭で夜這いをむしろ誘うというの、どうかなあというふうにお話を申し上げたら、近きよさんは「いや、これ当時の常識よ」というふうなお話をしてくれました。

この方も百話クラスの方でございました。特に平野部であったもんですから、この方からは、この地方の吉四六話という風に言ってもよい、佐兵衛話というのがあるんですが、これを四十話程お一人から聴いたという記憶がございます。これも全部ガリ版にしまして、次にお邪魔する時にはそのまずいガリ版を持って行くと大変喜んでくれた。この人がお亡くなりになった時の、お葬式の写真、これが大変見事でございまして、手鞠をつけている姿を我々の前で見せてくれたんですが、こん時にたまたま大阪の写真家というのが来ておっ、ああこれ大変良いからというので、写真を撮ってくれたのをそのままお葬式の時の写真に使った。息子さんはその写真を見ながら、大変喜んでますが、僕が中に立ってこの写真を撮らせたんだというのをお葬式の挨拶の中に入れてくれたので、大変私は半分お葬式ですから悲しいんですが、得意になった記憶が

ございます。

というようなことで、この方からも大分お話を聴きまして、語り終わってからもしょっちゅう遊びに行っておったという。今でも漬物屋さんをやりながら、日本蕎麦の蕎麦打ちなんかを孫さんたちがやってくれておりまして、山形県では大変評判の漬物屋さんということになっております。

そういうことで、海老名さん、工藤さん、川崎さん、高橋さん、近きよさん共に三年に一回顔合わせをしようじゃない、ということ、海老名さんの八十八歳の年祝いの時には全員が、来てくれたという記憶がございます。そういうことでガリ版が取り持った私の調査が大変そういう意味では、私の方も得をしたし皆さんからも喜んでもらえたというふうな意味では、良かったなあというふうに思います。

後は、私のガリ版による昔話・民俗関係のということで大半ここに持ってきてありますので、比較してもらえればいいんじゃないかというふうに思っています。

ただ少し、偉いことになると思うんですが、その段階で置賜民俗学会という小さな学会を作り上げたんですが、この時の中心になってくれたのが、当時の山形大学の工学部の今はなくなっちゃったんですが、工業短大というのがあったんです。その主事をなさっておった、江田忠なほしさんと言うんですが、この方が「俺の研究室に來い」と言うので、そこで発会式をやったんです。この方は京城帝大の出身の方でございまして、第二次世界大戦が終わると同時に、引揚をしてみました。大変苦労した方です。京城大学におった時に、秋葉隆先生、あの方の研究室での助手をやっておった方なんです。そして、社会学がご専攻だったんですが、山形で社会学をやつてもしょうがないというようなことで、むしろ県の社会教育課長なんかやったんですが、『若妻学級』、どっかで聴いたことがおありの方もいらっしゃると思うんですが、これが実を言えば米沢

から出発したんですね。その『若妻学級』という本も残しておりますが、これを薦めて今でも、山形県のあちこちに残されております。この推進役をやったのが、江田忠先生だったんです。

そういうことで、秋葉先生の指導も受けた、じゃちょっと民俗をやるうということになりました、一年に一回ずつ地域を選定しまして、そこに一週間くらいづつ夏休みなんですが、入り込んで、分担をして調査をやったんですね。江田忠先生は大変偉いですから、その地区で非常に面白いと思われるものを一番最初に取り上げるんですが、僕は決まって人の一生の分野と口承文芸の分野を担当させられて、これが七年程続きます。こん時に聴きに行った時、もちろん報告書を出す訳です。『置賜の民俗』という本を十五号くらいまで出したんですが、これに報告をしなればいけない訳ですが、昔話をそのまま資料として提供して載せてもらうには、お金が足りないもので、しょうがないということから、雑誌に載せる報告とは別に、そこで聴いたお話をとにかく全部ガリ版にして残しておく、というようなことで例えば『中津川昔話集』とか『飯豊町昔話集』とかこういう形でまとめさせてもらったのは、大体置賜民俗学会で合同の調査をするという時に、報告書に書けなかった部分も含めて、昔話集を作ったというようなことになります。

後で振り返ってみると、一年にあの程度のガリ版を一番多い年で八冊作っております。まあ大体五冊から六冊ぐらいが、一年間にガリ版を切って出した冊数だと思うんですが、厚いのもそれから短いものもありますから。やがて、民俗関係も含めて二十年程やったのを、『ガリ版二十年』という形でまとめさせてもらったし、それからガリ版が百冊になった時、ですからガリ版による云々、（＝当日の資料を参照）というやつは百冊目をちょっと覗いていただけるとよいと思うんですが、『及位の昔話』の三というのが百冊目に当たります。面倒くさいので、百一冊目の『及位の昔話』の四まで、いや百二冊目の五までやった段階で、今までガリ

版に刷ったものの目録くらいは残しておきたい。というふうにして、刷ったのが、百三冊目の『ガリ版百冊』という本でございました。ここに持ってきてありますから、見ていただければ、ガリ版でどんな内容のガリ版刷りを作ったかということが、わかっていただけるんじゃないかというふうに思います。

というふうなことで、ガリ版とずっと仲良しになっちゃったんですが、この間ガリ版の、網が破れるんですね。網は大体十枚くらい買った記憶がございます。それからインクも商売をやっている方はもう開けたらたちまち使うんじゃないかと思うんですが、私の場合には時々もちろん休みます。忘れて蓋を開けたままにしておいたりしておりますので、固まってしまいますよね、インクがね。そこで印刷屋にお願いをして、油を貰ったりしまして、一生懸命こうカマシテ（かき回して）というふうなこともやった記憶がございます。ガリ版のヤスリの方は大分使ったんですがたまたま、米沢の高等学校に勤めておった頃もまだガリ版時代なんです。たぶんそういうことをした記憶はないんですが、昔話集のガリ版の場合には、家に帰ってからやることにしておったんですが、たまたま休み時間にコッソリどっかの教室に行つて、昔話集のガリ版を切っているんじゃないか、というふうと同僚に言われまして大変くさった（気にかかった）記憶がございます。そんなことをやった記憶は、全然無いんですが、次々にガリ版が出るもんですから、それを貰って裏側でそういう噂なんかを流されて大変迷惑をした記憶がございます。

そういうことで言ってみれば出来上がったガリ版を持って、もう一回話者（の所に）行って「これできました」というふうに言う大体「この次いつ頃来る」と言うお話になつてね、「それまで一生懸命思い出しておくから」というふうに言われまして、特に印象深いのは比較的後の方なんです③番目（当日配付資料参照）上山市榎下『佐藤家の昔話』のガリ版と考へてもらつていいと思うんです。ちょっと二番目が抜けま

したが、後で補足をしたというふうに思います。この時にたまたま佐藤家にお邪魔することになったのは、実を言えば野村純一さんのグループ、國學院のグループが、置賜地区の昔話を夏休みに収集するから一緒に行かないか、というふうに言われたので、よろこんで一緒に参加させてもらった訳です。その時の悉皆調査というのは、後で考えてみると、あんまり良い方法でないかと私には、思われたんですが、その時には初めてなものですから、大変喜んで学生を五人程連れまして、歩いたんですね。約一週間だったんです。國學院の卒業生というのは山形県に非常に多くて、神主さんそれから小学校の先生方に多いので、まあ事前に連絡をとつてくれてたんでしょう。そこに行つて、一週間泊めてもらいながら、山の奥の方から上市市内まで歩いたんですね。

置賜地区で収集するという事になって、私は小国町に行く予定だったんですが、たまたまこの時に小国に赤痢が発生したんですね。そこで町役場の方から野村さんの研究室に緊急の連絡が入りまして、せっかく来てくれるのに赤痢が発生したんで、ちょっと待ってもらいたい。しかし、全体の変更をする訳にはいかなかったんで、しょうがないから、置賜地区に一番近い村山地区の上山に行つてくれというふうに言われまして、私出身が上市市出身なもんですから、それなら大変良いということで、一週間学生を引つ張つて歩き回りました。

たまたま榎下に行つた時に、どっかでおにぎりを食べなくちゃいけないというので区長さんをお願いしたら、いや昔話ならあの方が知っているよと。あの方には裏に大きな蔵があつてね、夏休みですから非常に暑い訳です。そこで、ご馳走になつたら良いじゃないかと区長さん自身がちょっと昼食の場所を貸してもらいたい、というふうな我々の前で電話をかけてくれたので、その佐藤さんの所にお伺いして、昼食をいただいた訳なんです。この時に昔話も知つているというお話なので、まあ良ければ語つてもらいたいというふうな言つたら即座に七つ程のお話を

出してくれました。

しかし学生諸君は、昼食の場所というふうにしか考えていなかったのですね、テープレコーダーだけは、僕が一台だけ持って行ったので、あとはスイスイと次の予定の場所に学生は歩き始めたんですね。私は楯下には、小学校時代あたりから何回も行ったことがありますので、そこで立ち止まって、本当のところ何話くらい知っていますか、というふうに聞いたら、ちょうど向かいの親戚の方が、考古学の研究が非常に好きなお兄さん格の方だったんですね、佐藤孝一さんの。「彼も知っているから合わせると百くらいになるかなあ」というお話だったんです。

そこで置賜地区をグルグル巡りまして、ひとまず落ち着いた時にこのことを思い出して、佐藤さんに電話をかけたんですね。「この次聴きに行つて悪いか」というふうに言ったら、良いよというふうなことです。で、出かけて行つたんです。一番始めにゆくりお話を聴きました時に、聴いたのが確か、三十五話、四十話近くだったと思います。『佐藤家の昔話』の一冊目が大体それに当たります。そこでそれを急いでガリ版にして、二回目に行く時にそれを持って行つた訳ですね。事前に「いつ良いか」と電話をしたら、「この日に来い」というふうなものですから、朝早くから九時頃までに来てくれというので、朝大分早く起きて、上山駅までJRを使いまして、そこからバスで行つたのが確か、八時半くらいに佐藤家に着いちゃったと思うんです。

そしてしばらくお茶をご馳走になっておつた時に、隣のお爺さんが、来たんですね。僕が「調査に行くから」というふうにお話を申し上げたら「俺も一緒に聴いて悪いか」というように隣のお爺さんが言う。まあ良いだろうということになったので、僕が行つた後にお茶をご馳走になつている時に、やって来たんですね。ガラッと戸を開けて、「カタロウの佐藤さん。お早う」と言うんですね。「カタロウ（語郎）の佐藤さん」という意味です。全然意味が判らなかつたんですが、テープに

収めて、ちょっと奥さんがお茶を出してくれた時に、お爺さんが脇に座つておりましたから、「今朝なんと言つて来られたんですか」というふう

に聞いたら、「こつちの家は、カタロウの佐藤だから、カタロウの佐藤さん、お早う、と言つてきたんだ」というふうに言うんですね。「一体それ何」というふうに聞いたら、明治に入った初年くらいまでは続いていたんですが、楯下という集落で毎年小正月一月の十五日に村あげての語り比べをやつておつたと。今は観音堂になつてはいるんですが、昔は、お寺さんだったというふうに言うんですね。福聚寺というお寺さんだったというふうに言うんですが、そこで村の人を集めて語りを披露したもんだ。われと思わんものが集まつて、語りを次々に披露したんですが、その一位になつた時には、あそこ宿場町なものですから、参勤交代の助郷役が非常に多かつたと言うんですね。そこで普通の農村で調べてみると大体一年間を通しての足、例えば「橋が壊れたから直そう」というんで村の若い人を集めて橋を直すとかね。冬は雪踏みがあるんですが、こういう足があるんですが大体普通の農村部では年間三十回くらいなんです。ところが佐藤さんから聴いて、楯下の例を見たら、その約二倍なんです。あそこは。だから足というのは特に上山藩の人足みたいな形で出さなければならぬ時には、忙しいとかなんか言つておれない訳です。殿様からの命令ですからね。

そういうことで、文句無しに足足がかかる。ところが語りで一等になつた人だけは、一年間人足が免除になるという約束だったと言うんですね。そこでやっぱり、我と思わん者が集まつて、語りを披露したんですが、大体村の人が聞き手な訳ですから、当然笑い話の主になつたと思うんですね。そこで、大変喜ばれたお話として、佐藤家に残っているのには、ホラ話がいっぱいあるんですね。ホラ話で一等になつた時には、その人を「ホラノフクゾウ」というふうに言つて、一等だから一年間人足が免除になると。ウソをストンと語つて笑わせたのはウソ話ですから、そう

いう人は、「ウソのカタロウ（語郎）」という。佐藤家の方は「ウソのカタロウ」を何回か取ったことがある。というので、あの近所の方はまだ、「カタロウの家」と呼んでおったんですね。

じゃ、「フクゾウさん」の家は無いのかといったら、一軒あるというんですね。そこで佐藤さんを介してその家に出かけて行きましたね、「アタん所」に何かホラ話が残っていないか」というふうに尋ねたら、その人の年齢が、私と同じだったんです。まだ若かった訳ですよ。大変迷惑していると。あそこの家はホラを吹くんだというふうに言われているんで、そんな話は、聴いていないというので突っぱねられましたね、一話も聴けなかったんですが、たまたま佐藤孝一さんのお姉さんが、結婚するときに相手の家自体も、「ウソのカタロウ」の家だったらしいんですね。そこで、「カタロウの家」の結婚だという評判が立ったという話もしてくれました。

こういうことで、ガリ版を切りながら、もう少し、宿場の昔話語りみたいなものに接近することができんじゃないか、というふうに思ったのが、ちょっと前に戻るんですが「語りの座について」というのに気が付きました。最初であったような記憶があります。それまでは、例えば野村純一さんが、囲炉裏の語り場というのを非常に重要視してね、そこでどんな話が出るんだというふうなことを、私も大分教えてもらった訳ですが、まあ囲炉裏端は語りの当時の中心であったのは、もちろんなんです。それから例えば若者が冬の間藁仕事をやる、これ置賜では「ケゴヤ（木小屋）」と言いますが、村山地区山形市あたりでは、「ワラシゴトゴヤ（藁仕事小屋）」という言い方をします。冬の期間、広場に掘って小屋を建てまして、そこに若者だけが集まって藁仕事をする。という仕来りはまだご存じの方もいらっしゃるんじゃないかというふうに思うんですが、この辺では大体「ケゴヤ（木小屋）」と呼びます。そこで、工藤六兵衛さんという方から聴いたお話なんかは、多分に「ケゴヤバナ

シ（木小屋話）」というふうに言いますが、若者の連中が集まって出るお話が、主であったんじゃないか。

ということで、たまたま荒砥に前に勤めた学校の当時の先生方と一杯飲むという話になりまして言った時にね、実は馬鹿智話が非常に面白い。この辺では、「ミナミノヤマノ（南山の）馬鹿智」というふうに呼んでおりまして、馬鹿智話のことをね。ミナミノヤマ（南山）というふうに言うのと馬鹿智話のことを指すくらいなんです。

そして、そのミナミノヤマはどこかと言えば、福島県の会津地方なんですね。あそこは檜枝岐などがあるんですが、あそこは馬鹿智の出る所だというふうに、置賜地区の方が言っており、山形、置賜から言わせれば、南の方ですからみんな「南の山の馬鹿智」というふうに言うんです。そういうお話は専ら、「ケゴヤ（木小屋）」でのお話だった。合わせて先程もちょっと言った、置賜の吉四六さんのお話、佐兵衛というのも大体「ケゴヤ（木小屋）」で主に語られた、という風なことが判ってきました。

こういうことで、どういう場所でも昔話を語るのか、によってそこで出されるお話というのは、ある程度規制されたりね、やっぱり若い人たちです。それから、「ケゴヤ（木小屋）」ではもう「猿蟹」のお話は終わっちゃってる訳ですから、こういう話はない訳ですね。

ということで、そっちの方に目を向け始めまして、例えば秋田に行った時に、お葬式の通夜の晩に語るお話とかね。あるいは野村純一さんの奥さんである、野村敬子さんが拾い上げてくれた、山形県の北の方、真室川町ではお産婆さんが時々巡回をする訳です。頼まれた、妊婦の方にね。この時に話をしてくれるのが、例えば「産神問答」みたいなお話。その他にも「神様ムカシ」などと言って大分あるんですが、そういうことで語りの場とそこに出される昔話の語りというのは、ある程度結びついているんだと。これは、東京にいらっしゃる皆さんを前にして申し訳ないんですが、都会におって調査をする方は、なかなかつかまえない所

なんじゃないかと。これはやっぱり地域に住んでいるからできる一つなんじゃないかと思って、そういうものを追っかけて回して聴く度にこれをガリ版にした、という形を取ったというふうに言っていて良いのではないかと思います。

その後なんです。ガリ版で刷り始めていわゆる昔話集という形でジョイントでガチャンと留めましてね、表紙を付けてまして大体一回につき多い時には百部、少ない時には六十部くらい刷ってあっちこっちにバラまいた訳ですが、たまたま四番目（当日配付資料参照）をちょっと見ていただきたいと思いますが。阿部キヌオさんという、この方は朝日修験、出羽三山とは違った今は無くなっちゃったんですが、朝日修験の方に嫁さんに行った、実を言えば湯殿山修験の家に生まれた奥さんなんです。この方が山形で開かれた民話の会の語りを聴きに来ましてね、俺も知っているから来ないかと言われたので、喜んでこれ四回程お邪魔したんですが、山形市の山形駅のすぐ近くの阿部家に、お邪魔したんです。そこで修験だから湯殿山修験の家に生まれましたから、子どもん時どんな生活をしたのか。ここは一種の「坊」になってもおったんですね。そこで湯殿山修験の連中が、湯殿山に登るときに前の晩辺りに大分ウチに泊まってもらった。というお話がありましてね。この家では饅頭を作っておみやげに売っておったと。子どもん時にね、その饅頭作りに手伝いさせられたと。というお話がまずありました。

そして、朝日修験の方に嫁に行った訳ですが、山の中の修験の家なものですから、近所にお産があった時に手伝いに行っただと。後には産婆の代役を勤めたことも何回もある。というお話が出て、この時にこれは、差別の問題と結びつくんですが、四本指の子どもが産まれたのを取り上げた記憶がある。細々とお話をしてくれるんですね。そこで六本指の方も見たことがある。六本指の方は、五本の指がありますね。どこに出るんだと。こっちに出るのか。こっちに出るのか。というふうに言っ

たら、六本指の場合には、こっちに出るんだと。四本指の場合には小指がないという方が比較的多い。なんていう話をしてくれましたね。これは指ではなくて、肉腫みたいなもんですね。ここが膨れ上がって肉が飛び出してくる、というのが、まあ六本指ということなんです。そういう風なお話をするもんですから、これもテープをかけたばなしにしてお聴きしたんですね。

そして昔話集を作ろうと思ってテープを聴き返したら、むしろ一つのお話と次のお話に移るまでの大体十分間ぐらい、そういうお話が一杯詰まってるんですね。それはそのまま捨てる訳にはいかないということで、変な表題なんです。「お婆の手ん箱」という名前でのガリ版を切ったことがあります。

それで今までも注意はしておったんですが、いわゆる昔話集として昔話語りと次の昔話の間の間の時間まに語られるお話も、非常に貴重な民俗の資料だなぁというように感じ取ることができました。ただすべての語り手が、そうであるかというように言えば必ずしもそうではないですね。男の方なんかは、面倒くさがりが多いもんですから、語って中では語りにあるいは民俗に関わるようなお話が出て、休み時間お茶の時間には、決してしゃべらないという方が多いですね。あえてこっちから聴かないとなかなか返事が返ってこない。ただし女の方でこの阿部キヌオさんもそうだし、海老名ちやうさんなんかもそうだったんですが、本当はその間で語り出してくれたいろいろな民俗事象みたいなものも、大変これ参考になるんだなぁ、というふうなことを改めてこの段階で気付いたんですが、ちょっと私にしては遅かったなという感じがしなくもございません。

それから五番目（当日配付資料参照）の秋田に関しては、たまたま。こういう経過がございました。米沢で教えた娘さんのお父さんが、山形県の営林署の置賜管内の所長さんを務めておったんですね。退職なさっ

て実家が秋田なものですから、秋田に帰ったんですね。その娘さんを私自身教えた訳ですが、懐かしがって時々、東京に出る時米沢に寄るんだ。なんていうお話なんで、僕の家にも遊びに来てくれたこともあったんですがね。盆踊りがあるから、秋田に来ないか、というのでお父さんから電話をもらったんですね。お盆だから一緒に飲もうと。電話をもらったので喜んでお邪魔した訳です。行った次の日が、盆踊りだったんですが、大雨だったんです。そこで盆踊りは中止になったんです。

しょうがないなあ。じゃあ県立博物館に行こうかということでも秋田県立博物館に行ったら、博物館の嶋田忠一さん。民話が好きなのであれば、古谷長之助さんという方が割に知っているようだから、というんで、まあ一緒に行ってみようか、と誘われたので出かけたのです。そしたらマツパジメに「蛇女房」のお話をしてくれましたね。一体これどんな時に語ったもんだと聞いたら、実はこれ、通夜の時に語ったもんだというふうなお話が出ました。大体通夜というのは今でもこの辺では、そういう仕来りもある程度残っておるんですが、東京の通夜とは大分違いましたね、通夜の時には決まって小学校一緒だったという方とか隣近所の方が集まって、一晩通夜をするんですね。次の日お葬式という形を取るんですが、その通夜の時に大体小学校の同級の方々が集まる訳ですから、この辺の仕来りとしてはこの時には茶碗酒、冷や酒を出さなければいけないと。おかずは、カズノコマメなんです。大きな皿にカズノコマメをドンと置いて、あとは一升瓶で注いで回るんですね。

そうすると始めは、亡くなった方を目の前にしてなものですから、小学校でこれは、勉強あまりしなかつたんだが、走りっこは一等だった。なんていう褒め言葉が出ます。しばらくすると酔っ払っちゃってね、中にはこんな奴とケンカして俺がぶん殴ってやった。死者の前でそんな話が出るのが時々あったというんですね。この時にそのお話、これをしてあげたんだ、というふうなことでも他にないかという話になったらもう

二話程出ました。後でお聴きしたんですが、これ西国三十三観音のご詠歌の説明のお話なんだと。これが一つ、まあ言ってみれば「蛇女房」の場合には、三井寺のご詠歌のお話だということで、一番最後には三井寺のお話が出てくる訳です。

それ以外のお話も三つ程してもらいましたね。大変喜んで帰った記憶があります。こん時は次の日一日大雨降りて、私は向こう秋田を夕方出て、山形まで戻ってきたんですが、途中で汽車が水害のために、エンコしまして三時間遅れました。山形着が確か、予定では、七時頃だったはずなんです。十時過ぎてもまだ山形に着かないという状況だったんですがね。全然これ苦になりませんでした。そのテープを何回も汽車の中で聴いて、帰ってきた記憶がごさいます。

ということ、これは、後程ガリ版にする訳ですが、そういうことで、もつとないかというふうには、お話を秋田県立博物館の嶋田さんにお問い合わせしたら、その後も五話程送っていただきました。

山形に戻りまして、川崎さんにお聞きをしたら、ああそういうお話なら自分も念仏講に行った時に聴いたことがあると、いうふうに言うので、まさに通夜の昔話なんじゃないかなと思つた次第です。

そんなことがありまして、ガリ版が取り持ったので、それを元に語り手の方と交流ができあがったというふうには言っていないと思っております。

最後の『山形の民話』というのは、そこにも持つて来てあるんですが、百二十何号まで続いた半分はガリ版です。たまたま、NHK出版から、『出羽の昔話』というのを出版してもらったことがあるんですね。そしたら、契約書などにハンコを押させられましたね。こんな時にね、大体六月辺りに出した記憶があるんですが、今年中に契約金をお払いします。というので、それが百八十万円くらいだったんですね。非常に景気がよかつたと思うんです。月給がまだその三分の一にも満たない時代ですから、そんな時にポツと百八十万円入つたので私の方が、ビックリしましたね。こ

れを一つの契機に前から計画は立てておったんですが、ガリ版で、『山形の民話』というのを出して、民話に興味のある方に配ろうというふう
に思っておったんですが、その時の原稿料で何年か続いて、これ筑波（大
学）にお邪魔するまで、筑波から帰っても一冊ぐらい出して終わりになっ
たのかな。『山形の民話』というのを印刷して出しました。

これも研究には非常に都合が良かったことだなあとというふうに思いま
すね。変な文章を書くと、時々お叱りの手紙が来る訳です。

もう一つは、これ関敬吾先生から教えられたんですが、「お前、十枚
の原稿を書いたら、必ず論文形式にきなさい」と。そうしないと、あん
たの意見はみんな東京の学者から盗まれるよ、というふうに言うんです
ね。そこで論文形式というのは、どういうものかというふうに聞いたたら、
まず表題をちゃんとつけなさいと、あとがきなんていう名前じゃなくてね。
民話集を作って、一番最後に、あとがきに少し長く書いた、これあとが
きというんじゃないやなくて、あとがきに書いて表題はこうなんだ、とい
うふうに書きなさいと。その時に書くために使った資料は、ちゃんと後ろの
方にちゃんと書いておきなさいと。そうすると東京の学者も、いかに偉
くとも勝手に使ったりしないぞと教えられたので、ただ十枚で論文とい
うことはないんじゃないかというふうには私は思っておったんですが、そ
ういう癖がついて、それが私にとっては大変良かったことだなあとい
うふうに思っております。

ひとまずこの位にしまして、話を終わって後は、何かありましたら、
お答えできるものは、一生懸命お答えしたいというふうに思います。

よろしく願います。ありがとうございました。

小池

どうもありがとうございました。私も武田先生にいろいろとお教えい

ただいているんですけども、今回初めてお伺いすることも、すごく多
くてですね「ああそうだったのか」という風な新鮮な印象を持ちました。
ちよつと、汽車の時間もある方がいらつしゃいますので、そこに今お話
に出てきたガリ版もほとんど持ってきていただいていますし、いろいろ
と回していただける訳ですけども、何か、どなたからでも構いませんけ
ども、先生にお伺いしたいことがありましたら、お願いします。

——先程の『佐藤家の昔話』に関してなんですが、佐藤孝一さんに初め
てお会いになられたのは、先程のお話だと、昭和四十年に國學院大學の
野村純一先生の一行と一緒に行かれた時と。こちらのガリ版を見ますと、
一番最初に『佐藤家の昔話』ということで先生がガリ版を切られたのは、
昭和四十七年ぐらいなんです、その間かなり時間があるんですけど
も。——

武田

その間は、ほとんど置賜地区の昔話を集めて回っておりました。そして
ひと切（一区切り）ついたので、ふと思いで出して、百話なら全部聴こう
かなあと思って、出かけたのが、最終的には六百話になっちゃった、と
いうことです。

——もう一つなんですが、最初に佐藤孝一さんのお話を聴かれた時に、
それまで先生がお聴きになられていた、お話の在り様と、なんかちよつ
と違うとか、そういう印象とかがあっていうのは、どうだったんですか。

武田

あの佐藤さん自体が、当時桐の木の栽培などをやっております、責任者になっておったんですね。だからこの方は、ある程度文章を自分で書くということもできた、それから家が家なんでしょうかね。語りの家ということ。ある程度周りもこれを認めてくれておったということもありません。一番最初に聴いた時にいやに難しいことを民話の中に語り込んでですね。しばらくしたら、私の方も慣れてしまったんですが、なんか半分は歴史を語るみたいになつてもあった様な気がするんです。

それから置賜と違う所は、向こうは私が聴きに行った段階でもなお、相槌を打つという仕来りがありましたね、子どもらが聴きながら、「爺様が山に柴刈に行ったけれど」という風にいうと、「オットウ」と言わなければいけないですね、向こうは。こっちの方はそういう形跡は残っておりますが、ほとんど私が収集を始めた頃には、相槌は無くなっておりまして。というので、なんとなく、やっぱり印象は違うなということになりましたね。

——私の小さい時あります。——

武田

ああ、そうですね。村山地区山形近辺は、相槌は「オットウ」という風に言うんですが、米沢の福島県に近い所は「ハアート」という風に言いますね。新潟県に近い所は「サーンスケ」という相槌を入れます。

——大変面白いお話で、いろいろ考えたんですけども、いくつもお聞きしたいことがあるんですけどもね。一つさっきここで山形県における民話研究史考というのをちょっと拝読させていただいて、これは

山形県芸術文化協会の芸文史（誌？）編纂のため、それをまとめてみたという形で、お書きになってらっしゃいますが、このガリ版の形以外に、何か冊子になったものは？——

武田

山形県の芸文会議が計画して、各芸術部門の今迄の歴史を書き残そうと、原稿の依頼があり、私は〈民芸〉を書きました。その後数年して、二冊目、三冊目が出版されました。貴重な仕事だったと思っています。

（山形女子短期大学、国立歴史民俗博物館共同研究協力者）
二〇一〇年七月二六日受付、二〇一〇年十一月三〇日審査終了